様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３５０７５０

研究課題名（和文）卓越した球技スポーツ選手におけるグループ戦術に関する実践知の構造

研究課題名（英文）The structure of the effective group tactics: from narratives of prominent ball game players

研究代表者
會田　宏（AIDA, Hiroshi）

筑波大学・体育系・教授

研究者番号：９０２４１８０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：卓越した球技選手が獲得したグループ戦術に関する実践知の構造について明らかにするために，国際レベルで活躍した選手にアクティヴ・インタビューを行った。得られた語りを質的に分析し，以下の知見を得た。（1）グループ戦術では，対峙する相手の選択肢を少なくさせ，即興的に対応せざるを得ない状況を排除することが志向されている。（2）そのために，特にオフザボール局面において相手と味方の変化に対応し続ける能力が必要である。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to clarify the structure of the effective group tactics by applying knowledge obtained from the practical wisdom of prominent ball game players. To accomplish this, we conducted active-interviews with internationally-acclaimed defensive handball players and qualitatively analyzed narratives. The results were as follows:
1) Group defensive tactics among prominent players appear to make an opposing team reduce the choices and to remove improvisation in response to sudden situational changes.
2) It is necessary for defenders to continually adjust the action according to interactions with players and opponents, especially during off-the-ball defensive situation.

研究分野：ハンドボールコーチング論

キーワード：アクティヴ・インタビュー　コンビネーションプレー　即興性の排除

１．研究開始当初の背景

スポーツにおいて動きを指導する場面では，「動きがどのようになっているのか」といった客観的な情報を選手に与えるだけでなく，「どのような感じで動くとできるのか」といった主観的な情報，すなわち実践知を伝えることが効果的である。実践知に関する研究の必要性は，以前より指導実践現場では指摘されていた（Dale, 1996；阿江, 1999；ヘベル, 2001）。しかし，客観性がない，研究方法論が確立されていないという理由から，国内外を問わず，ほとんど研究されることはなかった。その傾向は，状況判断，相手とのかけ引き，味方とのあわせといった戦術的な要素が指導場面で強調されることが多い球技スポーツにおいて強かった。

本研究代表者は，科学研究費補助金（平成18～19 年度および平成 22～24 年度，いずれも基盤研究（C））の交付を受けて，卓越した球技選手における個人戦術に関する実践知について検討してきた。そこでは，まず球技における個人戦術に関する実践知の理解の仕方について検討し，個人戦術に関する実践知の個別事例を質的に研究する手続きについて開発した（會田, 2012）。続いて，国際レベルで活躍したハンドボール選手が獲得した個人戦術に関する実践知の構造（會田, 2007；會田, 2008），および個人戦術に関する実践知の獲得過程（會田・坂井, 2009）について検討し，①卓越した選手における個人戦術とは，対峙する相手選手の動きを見極めてからのリアクション的な行為であること，②それは対峙する相手選手と相互主体的関係を結び，間主観的に相手選手と「対話」しながら行為自体を変化させていくことができる前意識的な営みであること，③実践知の獲得には，「動きのコツとの出会い」「動きのコツの理解」「動きのコツの消失」「動きのコツの獲得」の 4 つの段階が存在する可能性があり，実践知の獲得過程が，紆余曲折に満ちた，弁証法的ともいうべき形成の過程であることを明らかにした。

球技では，対峙する相手選手に応じる「個人戦術力」とともに，数名の味方と「あうんの呼吸」でコンビネーションをあわせて相手に応じる「グループ戦術力」も養成しなければならない（會田, 2006）。グループ戦術力は個人戦術力と同様に，身体的訓練において初めて習得される身体知に支えられるために，行為主体の立場から質的にとらえる必要がある。しかし，そのような視点を持った研究はほとんどない。グループ戦術に関する国内外の先行研究の多くは，プレー結果を数量化して分析しているため，グループ戦術力を実践現場のリアリティが反映されるように検討されてはいないのである。

２．研究の目的

本研究の目的は，卓越した球技選手におけるグループ戦術に関する実践知の構造を明らかにし，運動を構造的に理解する能力が十分に開発されていないジュニア選手におけるグループ戦術力の向上に寄与できる知見を実践現場に提供することであった。この目的を達成するために，以下の 3 つの課題を解決した。

(1) 卓越した球技選手が持つグループ戦術に関する実践知を言語化する方法の開発
(2) 卓越した球技選手が持つグループ戦術に関する実践知の提示と解釈
(3) ジュニア期における効果的なグループ戦術指導への提言

３．研究の方法

(1) 卓越した球技選手が持つグループ戦術に関する実践知を言語化する方法の開発

卓越した球技選手におけるグループ戦術に関する実践知の構造を明らかにするためには，まずグループ戦術に関する実践知，すなわちコンビネーションプレーにおける「あうんの呼吸」の実相を言語化するインタビュー法を開発しなければならない。なぜならば，グループ戦術力は身体的訓練において初めて習得される身体知に支えられるために，行為主体の立場から質的にとらえなければならないが，その方法がこれまでに検討されていないからである。新たなインタビュー法の開発に際しては，大学ハンドボールにおいて国内トップレベルで活躍している選手の協力を得て，質的研究で用いられている 2 つのインタビュー法，すなわち聞き手と語り手が共同で知識を構築するアクティヴ・インタビュー法（ホルスタイン・グブリアム, 2004）と，複数の聞き手と複数の語り手がインタビューに参加するグループ・インタビュー法を改良したり，組み合わせたりすることを試みた。

(2) 卓越した球技選手が持つグループ戦術に関する実践知の提示と解釈

① まず，開発したインタビュー法を防御に関して卓越した技能を持つ元日本代表選手 5 名（男子 3 名，女子 2 名）に適用し，グループ戦術に関する実践知の収集を行った。次に，インタビューの音声記録からトランスクリプト（逐語録）を作成し，撮影映像から身体を使って表現された動きをイラスト化した。さらに，調査内容を，防御活動におけるグループ戦術に着目してインタビュー協力者ごとに個別事例としてまとめた。最後に，個別事例を解釈し，それらの中から「チームや選手が違っても共通すると思われること」を選び出し，それらの共通性および特殊性について考察し，個別事例を超えた一般性をもつ理論の構築（構造化）を試みた。

② 上記の質的研究法と併せて，記述的ゲームパフォーマンス分析を用いて，卓越した選手たちの防御におけるグループ戦術行動を数量的に検討した。

③ グループ戦術に関する実践知を指導者はどのように選手に獲得させているのかにつ

いて，卓越した指導者を対象に 1 対 1 の半構造化面接を行い，グループ戦術指導に関する語りに着目して検討した。

(3) ジュニア期における効果的なグループ戦術指導への提言

学術的意味を持つ研究成果に関しては，体育・スポーツおよびコーチングに関する学会などにおいて口頭発表するとともに，学術論文として投稿した。実践現場に提供できる研究成果に関しては，球技におけるコンビネーションプレーを指導，習得するのに役立つ図書を刊行した。

４．研究成果

(1) 卓越した球技選手が持つグループ戦術に関する実践知を言語化する方法の開発

グループ戦術に関する実践知をより多面的な語りとして生み出すために，研究開始時点では，アクティヴ・インタビュー法とグループ・インタビュー法とを組み合わせた方法を開発する予定であった。しかし，個人戦術に関する実践知を収集する方法を援用し，大学ハンドボール選手を対象にパイロットスタディを行った結果，インタビュー調査に先立ち対象者の内省を活性化させる事前アンケート調査を行えば，アクティヴ・インタビュー法を単独で用いることで，グループ戦術に関する語りが収集できることが分かった。これにより，調査協力者の負担を軽減させることができ，当初の計画よりも合理的な調査方法が開発できた。

研究実績の一部は，コーチング学研究第 27 巻第 2 号において「コーチの学びに役立つ実践報告と事例研究のまとめ方」として発表した。また，日本体育学会第 64 回大会体育方法専門領域シンポジウムにおいて「判定競技におけるコーチング論の構築を目指した方策」として発表した。

(2) 卓越した球技選手が持つグループ戦術に関する実践知の事例提示と解釈

① グループ戦術力の習得

国際レベルで活躍し，防御に関して卓越した技能を持つ元日本代表選手 5 名(男子 3 名，女子 2 名）を対象にアクティヴ・インタビューを行った。さまざまな選手の語りを，「コンビネーションプレー」に着目して選手ごとにまとめ，グループ戦術に関する実践知を個別事例として提示した。さらに，個別事例の類似点に着目して分析した。その結果，防御におけるグループ戦術では，攻撃プレーに即興的に対応せざるを得ない状況を排除することが志向されていること，すなわち攻撃プレーの展開に伴い，攻撃の可能性や選択肢を小さくさせ，攻撃プレーを限定した上で，個人の防御戦術力を発揮しようとしていること，そのために特にオフザボール局面において複数の相手と味方の動きに絶え間なく対応し続ける能力が必要であることが明らかになった。

研究実績の一部は，ハンドボールリサーチ第 3 巻において「ハンドボールにおける 1 対 1 の突破阻止に関する動きのコツ：卓越した防御プレーヤーの語りを手がかりに」として発表した。また，日本体育学会第 65 回大会体育方法専門領域シンポジウムにおいて「実践に活用できる戦術研究の方向性」として発表した。

② ゲームにおいて発揮されるグループ戦術行動の分析

世界トップレベルの男子ハンドボールゲームで観られるグループによる防御戦術行動を，記述的ゲームパフォーマンス分析を用いて数量的に検討した結果，類似したゲーム状況であっても，表出する防御のコンビネーションプレーがチームごとに異なり，グループ戦術がチームの戦術構想の影響を大きく受けることが明らかになった。

研究実績の一部は，日本ハンドボール学会第 4 回大会において，「世界トップレベルの男子ハンドボール競技における 6：0 防御の戦術的特徴—インサイドディフェンダーとハーフディフェンダーの防御行動に着目して—」として発表した。

③ グループ戦術力の指導

わが国のハンドボール界を代表する卓越した 1 名の指導者を対象に，1 対 1 の半構造化面接および質的分析を行い，グループ戦術に関する実践知をどのように選手に獲得させているのかについて事例的に明らかにした。その結果，ⅰ）指導者は，状況に応じてプレーを選択する能力，位置どりやタイミングを味方とあわせる能力を特に重視して選手を指導していたこと，ⅱ）指導者の指導観が「監督の直接介入による監督自身のハンドボール観の実現」から「選手に責任を持たせ，様々な状況を自ら解決できる自立した選手の育成」へと変容することに伴い，選手のグループ戦術力が向上していったことが明らかになった。

研究実績の一部は，ハンドボールリサーチ第 4 巻において「ハンドボールにおける卓越した指導者の指導力の熟達化に関する事例研究：高校・大学において全国大会で 17 回優勝している監督の語りを手がかりに」として発表した。

(3) ジュニア期における効果的なグループ戦術指導への提言

学術的意味を持つ研究成果に関しては，日本体育学会大会，日本ハンドボール学会などにおいて口頭発表するとともに，学術雑誌に投稿し，掲載された。実践現場に提供できる研究成果に関しては，球技におけるコンビネーションプレーを指導，習得するのに役立つ図書『ハンドボールスキルアップシリーズ目からウロコの DF 戦術』（グローバル教育出版, 2015）として刊行した。これらを通して，ジュニア期における効果的なグループ戦術指導に関して，他の研究者や実践現場の指導者と意見交換できる環境を整えた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 10 件）

① 會田　宏：私の考えるコーチング論．コーチング学研究，第 29 巻第増刊号，79～84，2016　依頼論文

② 松木優也，會田　宏：ハンドボール競技における防御および速攻の戦術指導に関する事例報告．コーチング学研究，第 29 巻第 2 号，209～220，2016　査読有

③ 中原麻衣子，山田永子，藤本　元，會田　宏：ハンドボール競技におけるセンタープレーヤーの攻撃プレーの特徴：国内大学女子トップレベル選手を対象に．ハンドボールリサーチ，第 4 巻，1～10，2015　査読有（日本ハンドボール学会奨励賞受賞）

④ 楠本繁生，田代智紀，會田　宏：ハンドボールにおける卓越した指導者の指導力の熟達化に関する事例研究：高校・大学において全国大会で 17 回優勝している監督の語りを手がかりに．ハンドボールリサーチ，第 4 巻，11～19，2015　査読有（日本ハンドボール学会賞受賞）

⑤ Yamada, E., Aida, H., Fujimoto, H. and Nakagawa, A. ： Comparison of Game Performance among European National Women's Handball Teams．International Journal of Sport and Health Science，Vol.12，1～10，2014　査読有　http://doi.org/10.5432/ijshs.201326

⑥ Yamada, E.：Evaluation of attack-contribution in collegiate women’s handball．7th International Scientific Conference on Kinesiology Proceedings，422～424，2014　査読有 https://bib.irb.hr/datoteka/698009.Konferencija-zbornik-2014.pdf

⑦ 船木浩斗，會田　宏：ハンドボール競技のセットディフェンスにおける 1 対 1 のプレー方法に関する研究．体育学研究，第 59 巻第 1 号，329～343，2014　査読有 http://doi.org/10.5432/jjpehss.13066

⑧ 船木浩斗，會田　宏：ハンドボールにおける 1 対 1 の突破阻止に関する動きのコツ：卓越した防御プレーヤーの語りを手がかりに．ハンドボールリサーチ，第 3 巻，1～8，2014　査読有（日本ハンドボール学会奨励賞受賞）

⑨ 田代智紀，會田　宏：ハンドボール指導者の熟達化に関する事例研究：新たなチームを立ち上げ全国大会常連校に育てた若手指導者の語りを手がかりに．ハンドボールリサーチ，第 3 巻，9～16，2014　査読有

⑩ 會田　宏：コーチの学びに役立つ実践報告と事例研究のまとめ方．コーチング学研究，第 27 巻第 2 号，163～167，2014　依頼論文 http://jcoachings.jp/jcoachings2012/wp-content/uploads/2016/03/1765f8069a25ff553f988e46d3de9281.pdf

〔学会発表〕（計 13 件）

① 佐藤奏吉，藤本　元：世界トップレベルの男子ハンドボール競技における 6：0 防御の戦術的特徴―インサイドディフェンダーとハーフディフェンダーの防御行動に着目して―．日本ハンドボール学会第 4 回大会，2016 年 2 月 27 日，東京理科大学葛飾キャンパス（東京都葛飾区）（日本ハンドボール学会大会賞受賞）

② 仙波慎平，山田永子：中学男子ハンドボール競技におけるボール規格の変更がゲーム様相に与える影響．日本ハンドボール学会第 4 回大会，2016 年 2 月 27 日，東京理科大学葛飾キャンパス（東京都葛飾区）（日本ハンドボール学会大会賞受賞）

③ 田代智紀，會田　宏：卓越したハンドボール指導者の熟達化に関する事例研究．日本体育学会第 66 回大会，2015 年 8 月 27 日，国士舘大学世田谷キャンパス（東京都世田谷区）

④ 山田永子：私の考えるコーチング論：ハンドボールのコーチング．日本体育学会第 66 回大会専門領域（体育方法）企画シンポジウム「競技横断的なコーチング実践知の一般化・体系化に向けて（“私のコーチングから私たちのコーチングへ”）」，2015 年 8 月 26 日，国士舘大学世田谷キャンパス（東京都世田谷区）（招待講演）

⑤ 船木浩斗，下嶽進一郎，會田　宏：ハンドボールにおける 1 対 1 の突破阻止に関する質的研究．日本体育学会第 66 回大会，2015 年 8 月 26 日，国士舘大学世田谷キャンパス（東京都世田谷区）

⑥ 田代智紀，會田　宏：ハンドボール指導者の指導観の変化に関する事例研究：指導の転機を迎えた監督の指導を受けた選手の語りを手がかりに．日本体育学会第 65 回大会，2014 年 8 月 28 日，岩手大学（岩手県盛岡市）

⑦ 會田　宏：実践に活用できる戦術研究の方向性．日本体育学会第 65 回大会専門領域（体育方法）企画シンポジウム「戦術研究を実践に活かすには」，2014 年 8 月 27 日，岩手大学（岩手県盛岡市）（招待講演）

⑧ 藤本　元，Nemes Roland：男子ハンドボール競技における 5 対 6 の数的不利な状況での攻撃について：学生レベルと世界レベルとを比較して．日本体育学会第 65 回大会，2014 年 8 月 27 日，岩手大学（岩手県盛岡市）

⑨ Yamada, E.：Comparison of Training for Young Players in European Handball．1st Asia-Pacific Conference on Coaching Science，2014 年 7 月 11～13 日，University of Hokkaido，Sapporo，Japan

⑩ Nakahara, M. and Aida, H.：Characteristics of the center back player’s attacking-play in Handball．The 21st International Congress on Sports Sciences for Students，2014 年 4 月 11 日，Semmelweis University，Budapest，Hungary

⑪ Ito, Y., Fujimoto, H. and Yamada, E.：World top-level men center back player scoring ability in handball – Focusing on two player, Nikola

Karabatic and Dalibor Doder．The 21st International Congress on Sports Sciences for Students，2014 年 4 月 11 日，Semmelweis University，Budapest，Hungary

⑫ 田代智紀，會田　宏：ハンドボール指導者の熟達化に関する研究―立ち上げたチームを全国大会常連校に育てた若手指導者の語りを手がかりに―．日本ハンドボール学会第 2 回大会，2014 年 2 月 15 日，駒澤大学深沢キャンパス（東京都世田谷区）（日本ハンドボール学会大会賞受賞）

⑬ 會田　宏：判定競技におけるコーチング論の構築を目指した方策．日本体育学会第 64 回大会 専門領域（体育方法）企画シンポジウム「一般（統合）理論としてのコーチング学の可能性と方法」，2013 年 8 月 29 日，立命館大学びわこ・くさつキャンパス（滋賀県草津市）（招待講演）

〔図書〕（計 2 件）

① 會田　宏，酒巻清治，田村修治，グローバル教育出版，ハンドボールスキルアップシリーズ 目からウロコのの DF 戦術，2015，144（99～141）

② 山田永子，會田　宏，中原麻衣子，原　史織，(公財)日本ハンドボール協会，小学校におけるハンドボールの授業〈ゲームでまなぶ楽しいハンドボール〉，2014，全文 59 頁

６．研究組織

(1) 研究代表者

會田　宏（AIDA，Hiroshi）
筑波大学・体育系・教授
研究者番号：90241801

(2) 研究分担者

藤本　元（FUJIMOTO，Hajime）
筑波大学・体育系・助教
研究者番号：30454862

山田　永子（YAMADA，Eiko）
筑波大学・体育系・助教
研究者番号：80611110